



疫病と向き合う 祈りから 医術へ

蘭方医・賀来寿平

日野で初めて種痘を実施し、
疱瘡（天然痘）の克服に多大な功
績を残した人物に賀来寿平
（1809-1891）がいる。

賀来寿平は、名を惟俊、字は春齋・敬叔、また棲霞山人と号した。文化6年（1809）、豊前国佐田（大分県宇佐市）に生まれた。賀来家は豊後を代表する武士団・大神氏の流れを汲む名門で、江戸時代には多くの名望家や学者を輩出している。寿平もその一人で、はじめ蘭方医でシーボルトの弟子でもある従兄弟の賀来佐之に医術を学び、さらに京都の典薬頭・錦小路家において医術を極め、天保年間（1830-1844）に日野大窪町で開業した。当時、日野に洋医はなく、その名声はまたたく間に近隣へと広がり治療を請う患者が列をなした。とりわけ種痘の名手としてその普及に尽力し、水口藩主加藤氏はその功をたたえて士分に取立てたという。

また、かねてより親交の深かった津藩藩儒の齋藤拙堂は、元治元年（1864）に永源寺を訪れた際に寿平を訪ねているが、この時に寿平の種痘医としての功績を讃えた漢詩を残しており、

その活躍ぶりを伝えている。

文化人・賀来春齋

賀来春齋（寿平）は、厳正かつ温厚な性格で、賢沢を好まず、読書にふけり、書画骨董を愛する文化人でもあった。京における知識人・文化人を列記した人名録である『平安人物誌』（慶応3年（1867）刊行）にも、文人としてその名が記されている。

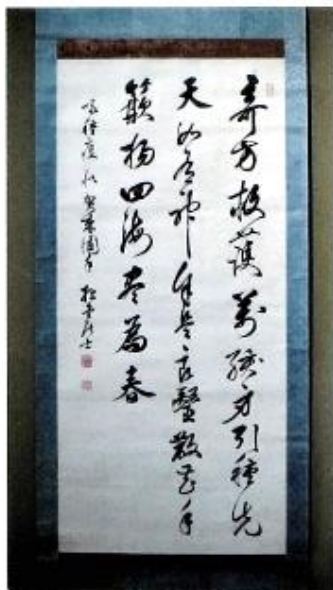
平素より客人との交流を好み、「棲霞楼」と名づけられた自邸には、先述の齋藤拙堂のほか、梁川星巖・富岡鉄斎・中井桜洲（弘）など、諸国から政治家・文人・画家などが次々と来訪し交流を深めた。

明治24年（1891）4月7日没。享年83歳。その功績を顕彰する墓碑が日野町大字小井口の天王山の中腹に建てられている。

近代医療制度の確立と 正野玄三

明治に入っても、コレラ・腸チフス・発疹チフス・赤痢・ジフテリア・疱瘡（天然痘）などの感染症が次々と流行し、人びとを苦しめた。

このため明治新政府は、幕末の医療政策を受け継ぎ、明治7



齋藤拙堂詩文
（賀来家資料、近江日野商人ふるさと館保管）
津藩藩儒齋藤拙堂は、詩文に長じ交友が広がった。育英のかたから文庫の充実や、洋学・種痘など新知識の導入にも奔走した



医道入門許可書（賀来家資料、近江日野商人ふるさと館保管）
天保9年（1839）7月に、医道長・上丹波朝臣錦小路頼易から、賀来寿平に宛てて出された医道入門許可書



賀来寿平尊像（賀来家蔵）
賀来寿平73歳の尊像。作者は長子である賀来寿一。寿一は、幼少期に寿平の養子となり、大阪医学校を卒業後、日野で医業についた